
眼鏡ちゃんと王子様

nocca.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼鏡ちゃんと王子様

【Nコード】

N5879Q

【作者名】

n o c c a .

【あらすじ】

私立 楯丘学園高校の普通科に通う眼鏡ちゃんは、成績優秀で生徒会長を務める真面目な女の子。

同じ高校の芸能科に通う王子様は、国民的スーパーアイドルグループの一番人気な男の子。

まるで接点がない二人だけど、実は半年前から付き合っている恋人同士だった！

王子様の仕事が忙しく中々会えずれ違いな日々を過ごしている2人の恋の行方は……?!

001・タイムリミットまであと10分(side azu)

「30分ぐらい時間が出来た。
いつもの場所で待ってる。」

私立 楯丘学園たておかぐえん高校には普通科と芸能科という少し特殊なコースが併設されていた。芸能科に通える生徒は、いわゆる“芸能界”という世界でお仕事をしている人たちだけで、ごく普通の一般人は入る事が許されないコースだった。

そんな特殊なコースがあるおかげで、学校の正門や裏門はアイドル達を一目見ようと生徒以外の人で溢れている。

学校が雇っている警備員はもちろん、生徒を守る生徒会執行部も動かざる終えない状況だった。

「ここ数カ月で一気に人数が増えたよね」

「毎日凄いいよねえ。私なんかこの間、ファンの子に足踏まれたのよ」

「これもやつぱり、マリブルの成瀬なるせ 鴉斗とぎとが転入してきたからだろ
うな。マスコミの数も今まで以上だからな」

「人気アイドルが朝一で学校に来る事なんて早々ないよな。まだ気がつかないんだろうか」

「そうそう、忙しいアイドルこそ朝は寝てたいもんね」

「……………」

第23期生徒会執行部が発足されて2回目の定例会が行われていた。今回の議題は、もうすぐ行われる文化祭の最終打ち合わせと最近増えている芸能科に通う生徒たちを見ようとしている人たちへの対策だった。

会計担当の泉くんいずみが、生徒会執行部宛てに寄せられたご意見番に目

を通しながら言い、書記担当の九条さんくじょうさんが長いストレートの髪を梳かしながら口を尖らせていて、副会長の虹岡くんにじおかがいつもながら落ち着いた感じで言った横で、書記担当の岩永くんいわなががノートパソコンを広げながら発言していた。

「香坂こうさか、どうかしたか？」

「うわぁ！ご、ごめん、だ、だ、大丈夫。ごめんなさい……」

携帯電話を広げながらぼーっとしていた私の顔を覗きこんできた虹岡くんに驚き、思わず椅子から転げ落ちてしまいかけていた眼鏡までも床に落としてしまった。

「悪い。脅かすつもりじゃなかったんだ……」

「うつん……こっちこそ本当にごめん。ありがとう……」

虹岡くんは床に尻もちをついた私の腕を取り引き上げてくれたうえに、床の上に落ちた銀縁の眼鏡までも拾ってくれた。

「会長、驚きすぎだつて。虹岡に失礼じゃん？」

九条さんが私の態度を見かねて言った。

「本当にごめんなさい……」

「いやいや、こっちこそ悪かったな」

私は首を横にふった。

「しかし、虹岡は紳士だなあ。そりゃあ、女子にモテるよな」

「岩永、何言つてんだよ。ほめても何も出ないから」

「うちのクラス、虹岡ファンの子いるよ。スカウトとかされない？」

「されないよ。っていうかさ、この話題やめない？早く本題に戻る」

虹岡くんの一言で、皆は話題を再び定例会の本題へと移った。

たしかに虹岡くんは日本人離れしたハッキリとした目鼻立ちの持ち主で、おまけに背も高い。それに紳士的とくれば、女の子たちが騒がないわけがない。

「ねえ、会長つてば、聞いてる？会長が意見くれないと進まないんだけど」

九条さんが少し苛立ちながら言ってきた。

「あ、ご、ごめんなさい……聞いてます」

「今日の会長、うわの空だねえ。なんかあるの？」
と泉くん。

「ううん。何もないよ。ごめん。ちゃんします」

「体調でも悪い？」
と虹岡くん。

「ううん。本当、なんでもないの。ごめん。えと……文化祭の最終調整の話し合いだね」

私は手元の資料をペラペラと開けながら言った。

それから定例会に集中しようと思いつながらも、ポケットの中で震えている携帯電話のバイブが気になって仕方なかった。

『タイムリミットまであと10分』

001・タイムリミットまであと10分)sideazu(後書き)

勢いで書きちゃいました(笑) 執行部の方々の設定が曖昧なので口調が分かりずらいかも;すみません…。

002・密会する二人(side a zu)

普通科と芸能科は同じ学校でも校舎が違ふし、何より休み時間ごとに風紀委員が当番制で芸能科校舎の入り口に門番のように立ちふさがっているため普段は行き来することが出来ない。このことを知らずに、芸能科目当てで普通科に入学してきた生徒は泣きを見る事になるが、全てがそうとは限らず同じ場所を共有する事もある。

たとえば、体育館やプールなどの施設は一緒になる事はないが共有して使用している。

だから芸能科が移動する際、校舎から彼らの姿を見れる事がある。それともう一つ。

普通科校舎の4階つきあたりの部屋。

図書室。

そこも共有する場所の一つである。

執行部の定例会が終わった後すぐに執行部の部室を後にして、私は階段を4階まで走って降りて行った。人の気配も感じない静かな廊下をバタバタと音を立てながら、駆け足で走る。

肩で息をしながら図書室の扉を勢いよく開けた。

図書室の先生も人の気配も感じないが、私は図書室に入ると扉をゆっくりと閉めて奥へと進んだ。

本棚と本棚の間をくまなく探すも誰もいない様子だったが、一番後ろの本棚で人影が見えた。

「鴉くん……」

私がおそろおそろ声をかけると、手に持っていた本に目を通していた男の子が私の声に気がついてゆっくりとこちらを見た。

すると本を閉じ、本棚へ片付けた後、銀色の高級腕時計で時間を確認するしぐさを見せる。

「タイムリミットまであと5分」

「ごめん……本当にごめんなさい……執行部の定例会が長引いてしまつてそれで……きゃッ」

ぐいつと私の腕をつかみ、ガタガタつて音と共に私を本棚に押しつけた。

顔を近づけてくる鴛くん、私の鼓動は跳ね上がる。

「と……鴛くん、か、顔近いんだけど……」

思わず顔を横にそむけた。

「あと3分。3分で何する？」

私のおさげになつていゝ三つ編みをほどきながら言つた。

「な、何つて……それより離れて。お願い……こんなところ誰かに見られたら大変な事になつちゃう」

「……まあ、いいか」

ふうと大きなため息をついた後、私の頬に一つキスを落として私から離れた。

「鴛くん、冗談悪い」

バクバクした心臓を抱えながらほどかれた三つ編みを編む私。

「あずが中々来ないのが悪いんだろ」

「だって、執行部の仕事が——」

「だからそんなのやるなつて言つたら。それでなくても時間ねえのに」

「だって……誰も立候補しなかつたし、先生にも頼まれて……それで——」

「もういいよ。そんな話。時間もつたいないし」

「ごめん……」

鴛くんはズボンのポケットから小さな包み紙を取り出して、私の方

へ投げた。

受け取った私は、小さな包みと鴛くんの顔を交互に見比べる。

「土産」

「あ、オーストラリアの？ありがとう」

「言っとくけど、時間なくて適当に買ったやつだから期待すんなよ」
ウキウキで喜んでいる私の横で、鴛くんは照れくさそうな表情を浮かべていた。

「それでも私のために買ってきてくれたんだよね？嬉しいよ」
包み紙から出て来たのは、青い小さな石がついていたヘアピンだった。

「うわあ、可愛い」

「これつけて今度デートな」

鴛くんはヘアピンを私の手から取ると、右側再度につけてくれた。
私がそれに微笑むと、もう一度私の頬にキスをした後、優しく唇を重ねた。

キスの余韻に浸る間もなく終わりを告げるように、鴛くんの携帯電話が静かな図書室に響く。

「時間切れだな」

「明日学校には来る？」

「午前中に少しだけ。午後からは音楽番組のリハ。時間出来たらメールする」

「わかった……」

「じゃあ、先に行くな」

「うん……あ、そうだ。ねえ、文化祭には顔出す？」
行きかけた鴛くんを引き止める。

「スケジュールがあえば」

「了解」

鴛くんが居なくなつた図書室で、その場に座り込み先ほどの余韻に浸るも何故か夢から覚めたような気分だった。

急に現実帯びて全部が色褪せていく。

普通の恋人同士なら、時間も気にせずゆっくりと二人で過ごせるの
だろうか？

002・密会する二人(side azu)(後書き)

二人の甘いひとときです。

まだ鴎くんの性格がふらふらしてる気がする；

ごめんなさい…；

003・文化祭に何がある？(side tokito)

私立 楯丘学園高校に転入したのは、夏休み前。

それまで通っていたごくごく普通の高校で出席日数が足りずこのままだと留年という通知を受けた。留年という事になれば、イメージに傷がつくという理由から芸能科がある楯丘学園へ編入した。

俺の中では学校というのは、“ON”“OFF”を切り替える場所
所で学校の中だけでも本当の俺でいたかったのに、芸能科という特殊な場所にいると、いくら“OFF”モードになってもTV局やスタジオで何かしら顔を合わせているような奴らばかりで安らい
ないし、それに恋人との時間さえも中々取れないし――

「だから――、その日は学校の文化祭だからスケジュール空けろ
って言うてんの」

「だから、なんでそんなに学校行事にこだわるんだよ。今までそんなの煩わしいって避けてたじゃないか」

後部座席に座っている俺は、足で運転席を蹴りながら駄々をこねる
子どものように言い、運転しているマネージャーの山根はバックミ
ラーで俺の顔を伺いながら言った。

「気が変わったんだよ」

「あ、わかった。鴛斗、彼女出来たんでしょ？」

「転校数カ月でもう新しい女か。さすがだな」

「まさか、同じ芸能科の生徒に手を出したんじゃないよね？」

メンバーが冷やかす中、山根は心配そうな表情をしながら言った。

「同業者に手出すかよ」

「じゃあ、普通科だ！いいなあ」鴛斗の学校は共学で。ボクも共学
が良かったよお」

俺の横で桃瑠ももろが羨ましそうに言った。

「普通科の子に手出したの――?!そっちの方がもつと困るよ!鴛

斗」

「うるっさいッ！とにかくスケジュールは空ける。いいな」

ドカッと一発勢いよく運転席を蹴りあげ、俺はブイツとそっぽを向くとヘッドフォンを装着して寝たふりをした。

目を閉じるとさっきまで一緒だったあずの事を想いだす。

抱きしめたあのぬくもりと唇を重ねたあの感触がまだ消えない。

息を切らせて待っている俺のために走ってあの図書室まで来てくれたっていうのに、俺は――

あずの少し潤んだ瞳と困っているあの表情を見てたら、どうしようもなく抱きしめたくてたまらなかった。

あずにかかると俺の理性って本当つくづく弱い。

すぐ飛んで行ってしまふ。

かなりヤバいかもしんない……

TV局について一通り番組の流れの打ち合わせを行った後、リハースルまでの間しばらく時間が空いた。

二人は学校の宿題や携帯ゲームをしたりして時間をつぶしていて、俺はというとあずがありがとうメールを画像付きでよこしてきたのを何度も携帯電話を開いて見ていた。

自宅だと思われる背景の前に三つ編みを解いた髪をしたあずがピースサインして映っている。

もちろん前髪には、さっき俺があげた青い石のヘアピンを留めていた。

「誰それ」

「うわあああッ！！」

俺の背後から顔を出して画像を覗いたので、思わずその場から離れ

俺は慌てて携帯電話を閉じた。

俺の声に二人が驚いてこちらを見た。

「あ、郁乃ちゃん」

「今日、一緒の番組に出るから挨拶しにきたのに。鴛斗、女の子の画像見てニヤついてるし」

桃瑠と芳弥（よしみ）に笑顔で軽く手を振りながら言った。

「ニヤついてねえよ。つーか、勝手に楽屋入ってくんなよ」

「ねえ、今の画像だれ？グラビアアイドル？」

郁乃は俺の横にじりじりと迫る。

「なんでもねえよ」

「ふ——ん。まあいいけど」

あまり納得いってないような表情を浮かべていたが、俺はそれ以上何も口にできなかった。

「あ、そうだ。うちのクラスの出し物決まったよ」

「はあ？」

「鴛斗、午前中來なかつたでしょ。その時に決まったんだよ」

「なになに？樞丘（しゅうき）って芸能科も文化祭の出し物するの？」

桃瑠が興味津々に俺たちがいるテーブルへと寄つて來た。

「芸能科も出し物するなら、來場者凄いいんじゃないの？」

芳弥一人が離れたところに座っていたが、会話に参加してきた。

「樞丘（しゅうき）って初日が校内祭で、2日目から外部入場もOKなのね。だから芸能科は初日のみ出し物するの。その後は自由参加だから売れっ子の子は來ないかな。私も初日だけ参加するつもりだし。鴛斗はどうするの？」

「あれ？あれれ？」

と桃瑠は首をかしげた。

「どうしたの？」

「鴛斗、出し物も分からなかつたのに文化祭参加したかつたの？」
桃瑠の発言に、俺はドキツとした。

「なにになに？鵜斗がどうしたの？」

「うるせーな。なんでもいいだろ」

「文化祭に何かあるんじゃないかなって思うのは、俺だけかな」
芳弥は教科書片手にやさしい笑みを浮かべる。

「なんか面白そう！僕も楯丘の文化祭に参加した——い！」

「くんな！！絶対来るな！！」

「それだけ必死になるなんて益々興味深いなあ」

俺はただ——ただ、あずと二人で文化祭を楽しみたいだけなのに。
一緒に校内をまわれなくても、少しの時間だけでもあいつと一緒に
いたい——

ただそれだけなのに……

「じゃあ、うちの文化祭くればいいじゃん！」

「行く行く——！」

なんでそうならないんだろうか。

003・文化祭に何がある？(side tokito)(後書き)

あずちゃんにメロメロ王子です(笑)

王子と一緒にいる男の子が、『マリブル』のメンバーですね。

『マリブル』は3人組です。人数増えると私が書きにくいんで(笑)

004・楯丘学園文化祭初日(s i d e a z u)

第23回楯丘学園文化祭が開催されようとしていた。

初日は、芸能科も参加するという事から生徒のみ参加の文化祭となっている。普段は閉じてある芸能科への入り口も今日ばかりはフルオープンで、生徒たちだけでもそれなりの盛り上がりを見せていた。生徒たちが盛り上がる———ということは、小さいざこざなども生まれたりするわけで、私たち生徒会執行部はそう言った対応に追われていて、実際文化祭を楽しむ余裕なんかあるわけなかった。

「本当、マジ勘弁してほしい。なんでみんな芸能科へ行けるってだけでテンション上がっちゃうわけ？」

「仕方ないよ。普段は閉ざされているんだから」

校内見回りをしてきてくれた九条さんと岩永くんが執行部の部屋に戻ってくるなり、パイプ椅子にドカッと座り机の上でバテていた。

「お疲れさまでした……」

そんな二人に冷たい緑茶を淹れた紙コップを机の上に置く。

「ねえねえ、誰か居てた？」

興味津々に聞く泉くん。

「誰かって？」

緑茶片手に九条さんは言う。

「芸能科の人たちだよ。誰かいた？メジャーな人」

「ああ、2年7組で早乙女 郁乃が売り子してたよ」

「本当？！見てみたかったなあ」

「たこ焼き屋なのに何故かメイド服着てたけど」

「ええ？！メイド服……」

思わず私は口にしてしまった。

「芸能科って何考えてるかわかんないよね。会長、お茶おかわり」
九条さんに言われた通りペットボトルを小さな備え付けの冷蔵庫か

ら取り出して、お茶を注いだ。

「2年7組って言ったら、成瀬 鴉斗は居なかったのか？」
と虹岡くん。

「居なかったよ。来てないんじゃない？」

「彼が来てたらもつと混雑してたかもなあ。郁ちゃんだけで良かったよ」

文化祭までの間にきた鴉くんからのメールには、文化祭のことについては一切触れていなかった。

だからきつと文化祭には参加しないんだろうと思っていたけど……

…… やっぱり寂しいなあ

一緒に校内をまわりたいたとか大それた事は望まないけど、せめて一緒にの行事には参加して欲しかったな……

それも贅沢なのかな……

「会長と虹岡くん休憩取ってきなよ。二人ずっと働きどおしでしょ」
泉くんは私と虹岡に向かって言った。

「それ、私も思ってた。二人ともなんだかんだで休憩潰れてるじゃん。今、校内落ち着いてるし、まわってくれば」

「でも…… まだ、やる事あるし……」

「こんなの明日でも間に合うんだし、二人でお化け屋敷でも行ってくれば？」

と岩永くんは制服のポケットからお化け屋敷のチケットを取り出した。

「なんでお化け屋敷なんだ」

「お化け屋敷やってる奴らが俺の中学の後輩なんだよ。それくれた。俺、興味ないし二人で行ってくればいいじゃん」

そう言っただけで泉くんはチケットを虹岡くんに押しつける。

「…………… どうする？香坂」

「でも……………」

「ああ——もう！こういうのは、もらつとけばいいの。ほら、行つてきな。虹岡くんと一緒に行けるなんて超ラッキーなんだよッ！」
少し苛立った様子の九条さんが、私を虹岡くんの隣まで手をひいて連れて行つた。

「そうなの？」

「そうだよ。虹岡なんか誘つてくる女の子ことごとく拒否つてんだから」

「ええ？！じゃあ、私なんかも……ごめんなさい」

私はペコつと頭を下げた。

「拒否つてなんかねえよ。ただ、執行部の仕事があるから優先しただけ。それから香坂は頭下げなくていいから」

「っーか、おまえら早く行けよ。休憩なくすぞ」

と岩永くん。

「ついでに校内見回つてきてよ。そういう名目があれば二人で堂々と行けるでしょ？」

「見回りしてたら休憩じゃないじゃん」

と泉くん。

「うつさい」

「じゃあ——香坂が迷惑じゃなかったら一緒に行くか。多分、時間に余裕あるのも今日だけだろうから」

「迷惑だなんて……じゃあ、お言葉に甘えて。もし、何かあったらすぐに連絡下さい」

「ハイハイ。了解」

「いつてらつしゃ——い」

3人に快く見送られ、私と虹岡くんは執行部を後にした。

004・楯丘学園文化祭初日(s i d e a z u)(後書き)

最近、生徒会執行部のメンバーを書くのが楽しいです(笑)
いまいち、泉と岩永の区別が出来ません；

在校生のみのお祭りでも学校の中は盛り上げていた。教室は派手に飾りつけられているし、模擬店をやっているクラスではコスプレをして呼び込みをしているクラスもあつたりして、活気づいていた。その中を私と虹岡くんが並んで歩くんだから、そりゃあ目立たないわけがない。

虹岡くんファンの女の子からは鋭い視線がチクチクと突きささる。

「虹岡くんってどういう女の子が好きなの？」

「えっ？」

「あ、いや、別に……深い意味はないんだけど、色んな女の子からお誘いがあつたみたいだし、どんな女の子が好みなのかなって思ってた」

「そうだな……好きになった人が好みのタイプだな」

「かつこいいね。サラッとそういうこと言えるなんて」

「じゃあ、香坂は？香坂の好みはどんなのなんだ？」

「私は——」

鴛くんの顔が浮かんだ。

TVの前でファンに向けて笑ってくれている笑顔じゃなくて、私だけのために笑ってくれている笑顔がハッキリと見えた。

そう言えば最近、鴛くんの笑顔見れてない。

「——坂？香坂、まさか真剣に考え込んだのか？」

「あ、ご、ごめんなさい……うん、そうみたい。中々好みって聞かれると難しいもんだなって思ってた」

「俺、香坂のそういうところ好きだな」

サラッと言った虹岡くんの言葉に私は思わずドキッとときめいてしまい、顔が火照るのを感じた。
どうかその事に虹岡くんが気がつかないように……と心の中で祈っていた。

「ああ——！！会長さんと副会長さんじゃないですかぁ！お二人で来てくれたんですか？」

お化け屋敷をやっている教室の前につくと、お化けの格好をした受付の男の子が私たち二人を見るなら大きな声で言った。

「視察も兼ねて」

虹岡くんはそう言うのとチケットを手渡す。

「なんだあ、二人ラブラブで来たのかと思いましたよ。一斉メールで女子に知らせようかと……」

「期待に添えなくて悪かったな」

「いえいえ、じゃあ、これを機にお二人とも接近したらいいじゃないですか——！結構、ここでカップルになる人、少なくないですよ——！会長さんと副会長さんが入りま——す——！」

お化け屋敷入り口の扉を開けてくれて、入り口から光がもれないようにしてある黒の遮光カーテンを虹岡くんが少しだけ開けて前に進んだ。

遮光カーテンが閉じてすぐに辺りが真っ暗になり、私は急に怖くなった。

虹岡くんのすぐ後にいるけど、怖くて中々足が先に進もうとしない。迷惑かけないようにしなきゃって思えば思うほど、足が前に行かない。

「香坂大丈夫か？」

「ごめんなさい……あんまり大丈夫じゃないかも……」

虹岡くんは小さく微笑んだ後、私の左手をそっと握った。
鼓動がドキンと跳ねあがっている。

怖いからなのか、それともぎゅっと繋がれている手が心強いからかな？

青白い照明に奇妙な音楽、お化け役の生徒たちがここぞとばかりに脅かしてくる。

私は虹岡くんの後ろで、その度にワーキヤーワーキヤー騒いでしま
い出口にたどり着いた時はすでにバテバテだった。

「ご、ごめんね……なんか、色々と……」

「予想通りの反応だったから、俺は楽しかったけど」

「楽しかったって……ひどいなあ」

「じゃあ、香坂は楽しくなかった？」

「楽しいわけではないじゃん。怖かったよ」

すると虹岡くんは、笑った。

「あれ——？！お二人、お手手つないでるじゃないですかあ——

——？！もしかしてカップル成立ツスか？」

手を繋いでいる私たちに気がついたさっきの受付の男の子がやって
きた。

「ちが……これは、私が怖がって進めなくなったからそれで——
——！」

手を振りほどこうとした時、虹岡くんがぎゅっと強く私の手を握っ
た。

「彼女、かなり怖かったみたいで指が冷たくなってるから温めてる
だけだよ」

「な——んだ、そうなんですか。まあ、副会長さんが会長さんには手出すはず不是吗。失礼しました〜！」

「……虹岡くん、ありがとう。もう大丈夫」

男の子が去って行った後、私は言った。

「……………」

「虹岡くん？」

「……………俺がしばらくこうしてたいんだ。ダメか？」

まさかまさかの言葉に私の心臓に緊張感が生まれて鼓動が速くなる。

「ダメか？」なんて聞かれて、「彼氏がいるからダメ」なんて言えるはずもなく、こういう場合はどうしたらいいのかわからない。

恋愛経験がゼロに等しい私には無理難題です！

「あの、虹お——！！」

バツと顔を上げて向かい合わせになっている虹岡くんを見た時、彼の後ろからブレザーの下に着ているグレイのパーカーのフードを被って黒縁眼鏡をした男子生徒が歩いてきて私たちの横を通り過ぎた。

鴛くん！！

私が鴛くんを見間違っわけないし、それに通り過ぎた後にほのかに彼の甘いコロンの香りがした

息するのも苦しいぐらい鼓動がさらに加速する。

どうしよう……鴛くんに見られた……！！

「香坂？」

「……………」

どうしよう、どうしよう、どうしよう

鴛くん、怒ってるかもしれない。
誤解されちゃったかもしれない。

でも――

振り返って、鴛くんを追いかけられない。
だってそんな事したらみんなにバレちゃう
みんなに……

じわりと目が熱くなって涙の粒が生まれた。
舌唇を噛み、スカートの裾を握りしめ、私はじっと我慢をする。

「香坂、ごめん……そこまで困らせるつもりじゃなかったんだ」
そういうと虹岡くんは繋いでいた手を離してくれた。

私は首を横に振った。

「俺、校内見回ってから執行部に戻るから先に帰っててくれるか？」
次は首を縦に振って頷いた。

「本当、悪かったな。忘れてくれ……じゃあな」

私の頭を優しくなでると、私に背を向けて歩き始めた。

虹岡くんが小さくなっていくのを見て、私は彼になんて事をしてしまったんだろうと自己嫌悪。

あれだと私が彼を拒否したって言っているようなもんじゃない。

いや、実際は受け入れられないんだけど……だけど……これはあんまりにも彼に悪い気がする。

手を繋がれて、良いも悪いも言わずに泣いて……そんなのってない。

だけど――

ごめん！

今はどうしても鶉くんの方に行かせて下さい！！

ごめんなさい！！

ペコッと虹岡くんが進んでいった方向に頭を下げると、私はくると向きをかえて鶉くんが歩いて行った方に向くと足を速めた。

005・お化け屋敷より怖いものってなぐんだ？(side azu)(後書

焦り過ぎな虹岡氏(笑)

やっぱりまだ口調がふらついでる；

別に文化祭には興味はない。

こういう仕事をしている以上、一般生徒のように楽しめないのが目に見えてるから今まで文化祭なんて仕事を理由に欠席していた。

しかし今回は、俺らみたいな芸能界で仕事している奴らでも楽しませてくれるような学校だし、何よりあずがいる。だから参加しようかと思っていたのに、「キャンセルできない仕事があるから」と参加するのは無理だと言われた。あずにその事をメールで告げると、『仕事だから仕方ないよね。来年は一緒に過ごせるといいな』というメールが送られてきた。

俺はまたあいつに我慢をさせてしまった。

普通の恋人なら一緒に過ごせる楽しいイベントなのに、俺はあいつと一緒に過ごす事さえ許されない。

恋人らしい事を何一つあいつにしてあげてない。

だから、たった2時間しか空いてない時間に駆け付けたっていうのに、こういう仕打ちなんだよ！

お化け屋敷の前で手を握ってるって、何がどうなってんだよ！！

「くっそ」

ガツンツと廊下に置いてあったごみ箱を思い切り蹴った。

なんだよ。これ。

すっげえムカつく！

ぐるぐると嫌なことばかり浮かんでくる。

胸の中がものすごく騒ぎ出して、それと同時に胸が痛い。

「あれ——?! 虹岡くんだけ戻って来たの?」

「香坂は戻ってない？」

「あれつきり戻ってきてないけど。なに？会長迷子になってんの？」

生徒の出入りが少ない階へ行こうと階段を上へ上へと上がっていたら、生徒会執行部の部屋がある階についたらしく、階段の踊り場からそんなやり取りの声が聞こえて来た。

廊下に出て覗くようにして生徒会執行部の部屋がある方を見ると、部屋の前で背の高い男とやたらと声がでかく髪の長い女が話している様子だった。

目を凝らして見ると、男はさっきあずと一緒にいた男に見えた。

「探してきてよ。そろそろ呼ばないと間に合わないし」

「九条、携帯に電話したらいいだろ」

「会長、電話忘れてるんだって。虹岡が探してきてよ。泉も岩永も体育館の方に行っていないし、私は留守番しなきゃだし」

「……………わかったよ」

「見つかったら、体育館の方に行つてね！」

「ああ」

話し終えた男は、俺がいる方へと向きをかえて歩きはじめた。どんな顔をしてるのか、見物してやる。

少しずつ歩いてくる男をじつと突っ立って待ちかまえていた。近づいたら胸倉つかんで、何か一言いってやりたい気分だ。

「鴉くんッ！」

急に踊り場の方から声をかけられ、俺は腕を掴まれた。

後ろを見ると、そこには今にも泣きそうな顔をしているあずだった。

「あ……………」

「香坂」

“あず”と呼ばうと思った矢先、あの男があずに気がついて声をかけてきた。

あずは咄嗟に掴んでいた腕を離れた。

「に、虹岡くん……」

「何かあったのか？」

虹岡という男はチラリとこちらの顔を伺いながら、あずに向けて言った。

「あ、ううん、別に何も……」

あずは俺に視線を向ける。

「図書室に行こうと思ってたんだけど迷っちゃって、それで彼女に場所を聞こうとしたら驚いたみたい」

俺はにつこりと営業スマイルを浮かべる。

「図書室はこの下だよ」

「ありがとう」

俺はそう言うつと一度もあずの事を見る事もなく階段を降り始めた。後ろ髪を思いつきり引かれている気分だったが、一度も振り返る事もなく図書室へと向かった。

普通の生徒だったら、あんな嘘つかなくていいのにな……

俺が一般生徒だったら、堂々とあいつの前で恋人宣言出来るのに……

苛立ちが増していく――

006・BAD TIMING)side tokito)(後書き)

鴉くん可愛いなあ〜と思うのは、親ばかりでしょうか(笑)

007・彼女の想い(s i d e a z u)

せつかく会えた鴉くんが一度も振り返る事無く、階段を降りて行く。今すぐここで、誤解だよって言いたいのに、それすら出来ないなんて……

この恋愛の現実を突きつけられた気がする。

「香坂」

虹岡くんの声に私はハツとして顔を上げた。

「あ……えと……さっきはごめんなさい。虹岡くんにあんな思いをさせてしまつて……でも、あの、決して虹岡くんが嫌だつたというわけでもなくて……ただ、私……虹岡くんの事は……あの……」
「もそもそと言っている私に、虹岡くんは優しく微笑んだ。

「もういいよ。俺の方こそ悪かつたな。香坂のこと困らせるつもりはなかつたんだ。これから副会長として頑張るから、よろしくな」
「こちらこそ……よろしく願います」

私はペコリと頭を下げた。

「ああ——！！まだそんなところに居たのぉ？！体育館に移動してよ！もうすぐ始まるんだから！」

執行部の部屋から出て来た九条さんは、私たちを見つけると大きな声で言った。

「今行くよ」

「ああ！もうすぐゲームの時間だよね！！急がなくちゃッ！泉くんたちに迷惑かかっちゃう」

私たちは、一斉にバタバタと階段を駆け下りて体育館へと急いだ。

体育館では、舞台発表を希望したクラスや軽音楽部や演劇部などが

順番に発表をしていて、初日最後となるイベントは毎年生徒会が主催していて、今年の出し物は、椅子取りゲームだった。事前に参加希望者を募り、体育館にパイプ椅子を円になるように並べて、軽音楽部にBGMになるような音楽を頼み、笛の合図に着席する。ごくごく単純なゲーム。

優勝者には、食券半年分を贈呈する。

「遅い！いつまで休憩してんだよッ！」

体育館で準備をしていた岩永くんはご立腹な様子で私と虹岡くんを迎える。

「遅くなつてごめんなさいッ！！」

「悪かったな。岩永に泉」

「会長とどこまでご休憩してたのですかあ？」

パイプ椅子を両手に持ちながらニヤニヤ顔で虹岡くんに責め寄る泉くん。

「ついでに校内の見回りしてただけだよ」

ひょいっと泉くんが手にしていたパイプ椅子を取り上げると、虹岡くんはまだ椅子が並べられていない場所へと向かった。

「会長、これ今日の参加者名簿」

九条さんは、今日の午前中までに提出された参加希望の一覧表を私に手渡す。

ペラペラと名簿をチェックしていくと、なんとそこに鶉くんの名前があった。

「……鶉……成瀬くんも参加希望なの？」

「そう。珍しいよね。アイドルがそういうの出席するなんてさ」

「……そうだね」

鶉くん、こういうの好きじゃないのに……参加希望出してくれてたんだ……

「……………」

「会長、椅子の数かぞえ——」

「ごめんッ！九条さん！ちょっと行ってくる！すぐ戻りますッ！！」

「ええ——？！！か、会長——？！！！」

私は参加者リストを九条さんに渡すと、駆け足で体育館を飛び出した。

やっぱり、少しでも鴛くんと一緒にいたい！！

一緒に文化祭を楽しみたい！！

廊下を走り、きつといるだろう図書室へと急いだ。

007・彼女の想い（side azu）（後書き）

文化祭編は、まだまだ続きますよ

図書室がある階につくと走っていた足を一旦止めた後、呼吸を整えながらゆっくりと図書室へと向かった。

鴫くんに会ったら言う言葉を何度も何度も頭の中で練習しながら、大きく深呼吸した後図書室の扉を開いた。

相変わらず静かな図書室は、人の気配さえしない。

ゆっくりと図書室を進んでいくと、一番奥の本棚と本棚の間で座り込んで眠っている鴫くんの姿があった。

「鴫くん……」

彼と同じ目の高さになるように私もしかがみこみ、彼の寝顔を拝見する。

トップアイドルがこんな無防備に眠ってるなんて、本当に仕事大変なんだなあ……

忙しい合間をぬって文化祭に顔を出してくれるなんて……鴫くん、ありがとう。

それなのに……鴫くに悲しい想いをさせてしまった。せつかく、来てくれたのに……

「ごめんね……鴫くん」

涙の粒がぼろぼろとこぼれおちる。

「俺に謝るようなことしたの？」

そう言った後、鴫くんはゆっくりと目を開けた。

「鴉くん……」

「何泣いてんだよ。泣きたいのはこっちだつての」

鴉くんはそう言った後、んん——と両手を上にあげて伸びた後、ぐいっと私を自分の胸元へ寄せた。

「鴉くん……」

「やつとおまえを抱きしめられた」

メソメソ泣いている私の頭に軽くキスを落とす。

「ごめんね……ごめんね……本当になんでもないの。お化け屋敷が怖くて、それで——」

「もういいよ。その話は。考えるとすっげえ胸くそ悪いから考えない事にした」

「鴉くん」

私が顔を上げたと同時に、鴉くんはチュツと軽く唇を重ねてくる。

「そんなメソメソ泣いて俺にしがみついている奴が、嘘つくわけねえしな」

「鴉くん……私はいつだって鴉くんが好きだからね」

「知ってるっつーの」

きゅっと私の鼻をつまむと微笑むから、私もつられて微笑んだ。

二人の時間に終わりを告げるかのように、鴉くんの携帯電話が鳴った。

マネージャーさんからだったみたいで、タイムオーバーだと言って立ちあがった。

「そうだ。鴉くん……生徒会のゲームに参加希望出してくれてたんだね。ありがとう」

「俺だつて本当は普通にあずと文化祭楽しみたいよ。一緒にお化け屋敷に行くのは俺だつっーの」

「ご、ごめんなさい……」

「もう絶対、他のヤロウと手繋ぐなよ」

「うん」

「もちろん、抱きつくのも禁止だからな」

「わかってるよ。っていうか、誰も私なんかには抱きつかないって」
「……」

「なに？」

「いや、別に」

「もう、心配性だなあ鶺鴒くんは。指切りでもしとく？」

私は小さく笑いながら小指を立てた。

鶺鴒くんの小指と私の小指がぎゅっと結びを作る。

「絶対約束だからな」

「うん……絶対約束する」

お互いゆっくりと目を閉じて、誓いの指きりと誓いのキスを交わした。

「じゃあ、行くわ。ゲーム参加出来なくて悪いな」

「ううん。来てくれただけでも嬉しいし」

「明日も時間出来たら参加する」

「うん、待ってる」

一緒に図書室から出て来てそんな会話をしながら扉を閉めた時だった。

「香……坂……？それに……成瀬 鶺鴒……？」

私たちの後ろから、虹岡くんの声がした。

008・図書室の約束(side azu)(後書き)

おおっとなりがちな展開?!(笑)

文化祭二日目は、生徒以外の来場が許されるため初日より文化祭は活気づく。ここぞとばかりにアイドル見たさに、来場するケースが多いからである。おかげで生徒会執行部は、初日以上に働かされる事になる。

開場時間よりも早く校門前で列を作って並んでいる来場者に注意を促したり、注意書きを記載しているチラシを配布したりと何かと朝から大忙しだった。

「さっき先生に確認したら、もう少し印刷した方がいいだろうって言ってたよ」

「泉くん、ありがとう。じゃあ、あと100部、九条さん印刷してきてくれる？」

開場前からバタバタしていて生徒会執行部の部屋には、現在3人いた。

職員室から戻って来た泉くんに、来場者に配布する舞台発表のプログラムを段ボール箱に詰めている九条さん。

そして私。

「了解。泉、悪いけど、この段ボール校門前まで運んどいてよ」

「はい」

「会長、その仕事終わったら、校門整備してる虹岡たちと合流してあげてよ。結構大変そう」

窓から外の様子を覗いていた九条さんは、指差しながら言った。

九条さんに誘われるように私と泉くんは窓辺に立った。

開場30分前だと言うのに校門前では人が溢れていて、虹岡くんたちが拡声器を使って整備していた。

そんな虹岡くんの姿を見てみると、昨日の事が蘇る――

「香……坂……？それに……成瀬 鴉斗……？」

私と鴉くんのツーショットに驚いている様子で、こちらをじっと見ていた。

私は鴉くんの横で、何か適当な嘘を……と考えるもあまりにも突然な事で頭が真っ白。

いくら成績が良くてもこういう時に嘘の一つでも言える頭が欲しいと心底思った。

「あ、あのこれは……その……」

「もういいよ。こいつにははっきり言いたいんだ」

「え？な、何を？」

一人でパニックになっている横で、鴉くんは虹岡くんにゆっくりと近づいていく。

「これ以上あずに近づくなよ」

険しい表情を浮かべて虹岡くんにそれだけ言うと、鴉くんは私たちに背を向けながら廊下を進んで行った。

「……」

「……………行こう。そろそろゲームが始まる」
くるりと私に背を向ける。

「虹岡くん、あの――」

「わかってる。このことは誰にも言わないから」

「……………あ、ありがとう……………」

それっきり虹岡くと二人で話す事はなくなってしまって、なんだ

か中途半端に気まずい状態が続いている。

そう感じてるのは、私だけかもしれないけど……

それに……あのお化け屋敷の一件についても、なんだか気まずいし

……

どうしていいのかわからないよ……

「うわぁ〜間近でも見ると凄い事になってるなあ」

段ボール箱を抱えながら私と一緒に校門前にある入場受付についた
泉くんの第一声だった。

「あ、泉、いいところにきた。そろそろ門を開けるから整列させて
くれるか？」

私たちを見つけた岩永くんが言った。

「了解」

段ボール箱を下に置くと、泉くんは走って校門の方へと向かった。

「ほとんどが芸能科目当ての客ばっかだったよ。」

「そうなの？」

「まあ、毎年の事って言うたらそうだけどさ。そうそう、何気に虹
岡のやつ、女の子に声かけられてたよ」

「そ、そうなんだ……」

「しっかり捕まえておかないと、虹岡、誰かのものになっちゃうか
もよ〜？」

「な、何言ってるの!？」

岩永くんの冗談に思わず顔が火照る。

いやいや、全然構わないんだけど………今日はどうも虹岡くんの話
が出ると、こういう顔をしているのか分からない。

「岩永、田中先生が職員室の窓からおまえの名前呼んでたけど」

私の背後からの声にドキツとする。

「ヤベツ！昨日提出する予定だった許可書忘れてた」

それから、あとはよろしく——！と言って岩永くんは猛ダッシュで職員室へと向かって行った。

「……」

ふいに二人きりになってしまい、鼓動が加速して行く。

どんな話題を虹岡くんにするればいいのか考える。

いつも、どんな話してたっけ……？

気まずい………

「あいつ、今日来るのか？」

運んできた段ボール箱からプログラム表を取り出しながら虹岡くんは言った。

「……どうだろう……」

「時間が出来たら来るって言ってたろ」

「……昨日の話、やっぱり聞かれてたんだ」

私は虹岡くんが無造作に受付テーブルに置いたプログラムを私は揃えてキチンと積み重ねた。

「ごめん」

「虹岡くんが謝ることないよ。こっちこそ、気を使わせてごめんね」

「いや……」

「それから——鶉くんのことごめん。彼、ああいうこと言う人じゃないんだけど………」

「それは香坂が謝ることじゃないだろ。それに——俺はあいつの宣誓布告を受けてたっから」

「え？」

急に私の三つ編みを片方手にすると、じっと私を見つめたまま彼は言った。

「あいつが、香坂のことを名前で呼んでるのがすげえムカついた」

009・宣誓布告(side azu)(後書き)

もうちょっと書きようがあったんじゃないかと思う。
タイトルもいまいち。

でも思いつかない……乏しいボキャブラリー；

010・台風一家がやってきた！(side・azu)

午後を過ぎると、朝の賑わいは嘘だったように受付では穏やかな時間が流れていた。

どうも人気アイドルが学校に来ていないという情報が流れているのか、混雑する様子もなかった。

受付当番をしていた私と九条さん、泉くんはつかの間のゆっくりな時間を過ごしていた。

「会長、そのヘアピン可愛いね」

風で飛ばされたプリントを拾おうと屈んだ時におさげ髪の下サイドにつけた青いヘアピンが光の加減で少し光ったらしく、それに気がついた九条さんが言った。

「僕も思ってた。それ可愛いよね。会長に似合ってる」と泉くん。

「ありがとう。この間、お土産でもらったの」

「彼氏から？」

「え?! な、ななんですか?」

その言葉に私は動揺する。

「すっごくキラキラしてるし、高そうに見えるから彼氏からのプレゼントかなって思ったんだけど」

「ま、まさか……ただのお土産だよ」

私、あの時単純に喜んでたけど……

九条さんの言うように、ひょっとしたら高いのかな?

このヘアピン……

鴛くんだったらありえそう……

「会長って彼氏いるの？」

と泉くん。

「い、いないない！私にいるわけじゃない」

「そうだよ。会長に彼氏いたら、私にいてもおかしくないよ」

必死に言つと、九条さんがすかさず口をはさんだ。

「それなにげに会長に失礼だよ。くうちゃん」

私たちがくだらない話で盛り上がっていると、校門前が異常に騒がしくなり黄色い声があがった。

受付にいた私たちは何事だと受付から身を乗り出してみると、人だかりの中から背の高いサングラスをした男の子とやや背が低めで茶髪のパーマヘアの男の子が、校門へと向かっている。人だかりに困惑気味のサングラスの男の子に対して、こんな状況でも意気揚々として愛想を振りまいている男の子。

「あれ、マリブルの桃溜と芳弥じゃない？」

「すごい！成瀬 鴉斗がいれば全員揃うじゃんッ！」

「……」

マリブルの二人を見て、二人がここに来るって事は——鴉くんも来るのかな？なんて事を思った。

「ちょ、ちょ、二人こっちくるよ！」

やや興奮気味に九条さんは泉くんの背中をバシバシと叩きながら言つた。

二人は大勢の女の子たちを引き連れながら、こちらへとやってきた。

「あの、芸能科2年の成瀬 鴉斗って今日来てますか？」

桃溜と呼ばれている方の男の子が私たちに訪ねる。

「えつと、えつと……」

舞い上がっている九条さんはチラリと私の方に視線を送ってくる。

「あ、ああ……えと、こちらでは把握してないのでわかりません」
「普通そうだから」

私が答えた後に、背の高い芳弥という男が言った。
桃瑠はそれにぶつと頬を膨らませる。

「担任教師に聞きましたか？」

「いや、いいです。ありがとうございます。ほら、行くぞ。桃瑠」

「行くつてどこ行くのさ」

スタスタと歩く芳弥くんを追いかけるように桃瑠くんはパタパタとその後を追いつ、女の子たちもそれについていく。

「あの——！」

受付を離れて校舎へと向かっている彼らを呼びとめた。

私の声には二人は足を留め、彼らについていた取り巻きの女の子たちも一緒にこちらを振り向く。

「あの、良かったらこれ——模擬店の案内や舞台のプログラム、それから校舎案内が載ってます。」

私はパンフレットを2枚彼らに手渡した。

「ありがとうございます！」

子どものような満面の笑みを浮かべる桃瑠に、落ち着いた笑みを見せる芳弥に私も釣られて微笑んだ。

「楽しんで下さいね」

「もちろん！」

彼らにペコつとお辞儀して受付に戻る間に、私は携帯電話を開いて鴛くんの番号に電話をかけた。

呼び出し音を4回聞いた後、鴛くんが電話に出た。

「もしもし？」

『なに？どうかした？』

「今——どこにいるの？」

『今、学校の裏門に向かってるとこ。あずは？』

「あ、あのさ……」

「ん？」

「マリブルの二人が来てるんだけど……」

「ゲッ！マジで？！」

「うん」

「あいつらマジで来たんだ……信じらんねえ——あ、郁乃は？郁乃は来てる？」

「郁乃……？」

「早乙女 郁乃だよ。あいつも今日来るってメールがきてたから……」

何故か静かにじわじわと黒いものに覆われていくのを感じた。

私と一緒にいない時間に鶺くんは、誰と何をしているんだろう……？
誰と、どんな話をするんだろう……？

みんなと居る時の鶺くんは、どんな感じなんだろう……？

「——い、おい、あず聞してる？」

「あ、ごめん。なんだっけ？」

「聞いてなかったのかよ。もういいよ。それより、もうちょっとしたら学校着くけど図書室これる？」

「少しだけなら……なんとか抜け出してみる。あ、でも今日、生徒以外の人も来てるから図書室閉まってるよ」

「じゃあ——屋上は？」

「あ、うん……立ち入り禁止だけど、空いてると思う」

「じゃあ、屋上で。あと10分ぐらいで着くから屋上で待ってるな」

「うん、あとでね」

鶺くんとの電話を切った後、少し顔を緩ませながら受付へと戻った。

010・台風一家がやってきた！(side・azu)(後書き)

ついにやってきました！マリブルの二人(笑)
さてさてどんな展開が…？

楯丘高校芸能科を選んだ理由は、どこの芸能科がある学校よりも自分が芸能人だつていうのを忘れさせてくれるぐらい楽しい行事があったから。

その中の一つ、文化祭は私の一番のお気に入り行事。

芸能科の生徒も1日だけだけど、模擬店が出せるってのは嬉しかった。

おそろいの衣装を作ったり、看板を作ったり、とみんな仕事の合間をぬって力を合わせて作り上げるのが凄く楽しくてこの高校を選んで良かったと思う。

ただ、クラスメートの中には仕事が忙しかったりして中々参加出来ない人もいたりする。

「ねえ、初日は参加出来るでしょ？やのつちとか楽しみにしてたけど」

「さあ……どうだろ。その日、取材と収録なんだよ」

歌番組の本番前セットの裏側でスタンバイしている時に、アイドルグループ『マリンブルー』の三人がスタンバっていた。その中にはクラスメートの成瀬 鴉斗もいて、私はすかさず彼に近づき文化祭に参加出来るか聞いてみた。

すると、やはり予想通りの答えが返ってくる。

「ええ——？！少しの時間もないの——？」

彼が着ている衣装の裾を掴みながら甘えるように言った。

「ねえよ」

そう言いながら、私が掴んでいた裾を解いた。

「初日は無理でも2日目は参加出来るよね」

鴛斗の背後からパーマヘアの桃溜が顔を覗かせる。

「え?! 本当?」

「桃溜」

「参加って言っても午後からだけだね」

あたかも自分が参加するかのような口調の桃溜。

「じゃあ、2日目は一緒にいられるね」

鴛斗の腕を組んだ。

「なんでおまえと一緒にいなきゃいけないんだよ。つーかおまえ仕事って言ってたろ」

鴛斗は私の腕を払いのける。

「大丈夫大丈夫! 鴛斗来るなら、時間作るし! 桃溜とかも来るんでしょ?」

「もちろん! 行くよ」

と桃溜はウィンクする。

「来るなよ」

鴛斗たちとは、デビューが同じという事もあったり何かと一緒にの仕事になることが多い。同い年つてもあつてメンバーの皆とはそれなりに仲は良い。その中でも鴛斗のことは、どこか気になる存在だった。

彼が近くにいると急に胸が苦しくなつて、意味もなく泣きそうになる。

それに、ずっとこの時間が続けばいいのにつて思う。

気がつくとそのことで頭がいっぱいで、誰よりも側にいたいと願っている。

「ねえ、そういえばさ、この間楽屋で見てたあの写真の女の人って誰?」

ふいに覗いた鴛斗の携帯電話に映っていた少しウェーブのついた髪

の長い女の人が、私はずっと気になっていた。

鴛斗がグラビアアイドルや女性芸能人にそこまで興味があるとは思えない。

だったら、あの女の人是谁なのか——ずっと気になって仕方なかった。

「おまえまだ言ってるの？しつこいな」

「だってなんかすごく慌ててたじゃない」

「気のせいだろ。ほら、本番始まる」

鴛斗は逃げるように私の横を通り過ぎて行った。

「最近、鴛斗おかしいんだよね」

と桃瑠

「なにが？」

「文化祭に行きたがったり、少しの時間でも学校行きたがったりさ。そんなの今まで興味なさそうだったのに」

「……」

胸の中に黒いしこりみたいな固まりが、小さく生まれたのを感じた。

文化祭2日の午後、下足ホール来客用の下駄箱でバツタリと桃瑠と芳弥に出会った。

二人はなんだか全速力で走ったかのように肩で息をしながら、苦しそうに立ち止まっていた。

「郁乃ちゃん！」

「ええ？！桃瑠と芳弥？！本当に来たの——？！……っていうか、どうしたの？つらそうだけど……」

「空き時間が2時間ぐらい出来たから、思い切って来たんだけど……」

…ファンの子に掴まってさ、振り切ってたんだ」
と桃瑠。

「そうなんだ……………あれ？鴛斗は一緒じゃないの？」

「あいつは朝からラジオがあって俺らとは別なんだ。…………あいつ来てない？」

と芳弥。

「まだ見かけてない」

「そつかあゝ。じゃあ、まだ来てないのかも」

「そう…………」

鴛斗が来るかもしれないと知って、なんだか心が弾む感じがした。

「ねえ、どこか静かに休む場所ない？へろへろ」

桃瑠は靴を履き替えるすのこの上に座り込んだ。

「ああ…………じゃあ、屋上行く？あそこならだれもいないと思うし」

わたしたちは誰にも見つからないように、廊下の端っこにある階段を上り屋上へと向かった。

011・彼は友達(side・ikuno)(後書き)

久しぶりの更新。

012・屋上は立ち入り禁止です(side・ikuno)

屋上に繋がっている階段手前には、立ち入り禁止というプレートが掲げられていてステンレス製のポール2本が、鎖と繋がれていて階段幅に合わせて立っていた。立ち入り禁止と掲げておけば、屋上への扉に鍵がかかっていると思うんだろうけど、実際は開いている。普段は立ち入りする生徒が多いけど、こういう日はわざわざ屋上へこようとも思わないと思った。

「と、鴛斗?!」

扉を開けて目の前に飛び込んできたのは、フェンス前で突っ立って制服を着た鴛斗だった。

「ゲッ、なんでおまえら——……」

「鴛斗、制服着てる——!」

桃溜は、鴛斗がきているブレザーの制服を指差し冷やかすように言った。

「おまえ、制服着たまま仕事してたのか?」

「うるせーよ!ラジオだしわかんねえだろ。つか、おまえらなんぞ揃って屋上にいるんだよ」

「二人が疲れたって言うから休憩しようと思って屋上に来たの。鴛斗こそこんなところで何やってんの?」

「別に。俺も疲れたから休憩してんだよ」

明らかに嘘をついているような口ぶりだった。絶対そういう理由じゃないと思うけど、私以外の二人が別にどうでもいいような雰囲気ですでに違う話題をしている。

「ねえ、そういえば昨日、鴛斗は学校に来た?私、メイド服着てたこ焼き焼いたんだよ」

「……いや、来てない。時間が取れなかったんだ」

「と――」

何か言いかけた桃溜の口を芳弥がふさいだ。

「郁乃ちゃんの子供のメイド姿見たかったな」

と芳弥はにっこり微笑む。

「別に……大したことないよ」

一番に見せたかったのは、鴫斗なのに……

鴫斗は全然興味なさそう。

「ぶつはツ！ 苦しいよ！ 芳弥」

手で口を塞がれていた桃溜は、ゼーハーゼーハーと息を急ぐ。

「悪い悪い」

「おまえらどつかまわった？」

と鴫斗。

「そんな余裕ないよ。ファンの子には囲まれるし、鴫斗は見つかんないし」

「まだ楽しいことの一つもないな」

口を尖らせている桃溜の横で、芳弥が言った。

「おまえは？」

「え？」

「今日、仕事で来れないって言ってたろ。時間でも出来た？」

「あ、うん……取材が一件キャンセルになって、夜の歌番組までの間、時間が少し出来たから」

そういう鴫斗はどうして文化祭に来たんだろう？

わざわざ空いてる時間を使ってこういう行事に参加するようなタイプには見えないのに、制服を着てまで鴫斗は文化祭で何をしようしてたんだろう？

もしかして……誰かと会おうとしてた？

そんな事を思っていると、タイミングよく屋上のドアが開いた。すると、眼鏡をかけておさげ髪のいかにも真面目そうな女の子が一人ドアから顔を覗かせた。

「あ……」

私たちを目の当たりにした眼鏡少女は、一瞬動きをとめた。そりゃそうだろう。だって行き成り目の前にアイドルが4人突っ立っているんだから。

「ここ立ち入り禁止じゃなかったのか？」
と芳弥。

「あ……あの、わ、私、生徒会長の香坂と申します」

香坂と名乗る彼女は、ペコッと頭を下げた後、話を続けた。

「今、校舎を見回りしてて、ここは一応立ち入り禁止なので……申し訳ないんですけど……」

と言いくそうに言った後、その後に続く言葉を言わなかった。

「あ、ごめんなさ——い！すぐに立ち去りま——す！」

「そうだな」

桃瑠と芳弥はそう言うと、彼女がいる出口の方へと歩きはじめ、私と鴛斗も仕方なく出口に向かった。

彼女は、「すみません……」と私たちにペコペコ頭を下げ、私の後ろにいた鴛斗と彼女が目が合った時、胸がざわついた。

何故そうなったのかはわからないけど、鴛斗が私や桃瑠たちに見せる表情とは違うように感じた。

「あッ！思いだした。お姉さん、朝、受付にいた人だよね」

桃瑠が突然振り返り、彼女に向けて言った。

「はい。朝は大勢の人に囲まれて大変でしたね」

にこつと微笑んだ彼女の顔を見た後、私は彼女の右サイドにつけている青い石のついたヘアピンが目がいった。

「――！」

私は、彼女と鴛斗の顔を見合わせる。
あれと同じへアピンをつけた女を知っている。

鴛斗が見ていたあの画像の女もつけていた。

嘘……まさかそんな……

もしそうなら……

胸がドキドキと加速して、黒いもやもやしたものが私の中に増殖していく。

なにこれ……なにこれ……

「おい、ボケつとしてんなよ」

後ろから軽く鴛斗からの蹴りが入る。

「……」

じつと鴛斗を見てると、泣きそうになりそうだった。

「あ？なんだよ」

「……………仕事行く」

「は？」

「仕事行くわ！じゃあね！」

私は笑顔で明るくそう告げると、階段を急いで駆け下りた。

ヤバイヤバイ

鴛斗を見ていると、泣きそうになる。

まだ真実かどうかわからないのに、確認してないのに……
胸の中がザワザワして落ち着かない。

考えるだけで涙がこぼれそうだよ……

勢いよく階段を駆け下り、3階の踊り場を過ぎて2、3段階段を降りた時前をよく見ていなかった私はドンっと上に登ってきていた人

と勢いよくぶつかってしまい、私はその反動で階段に横たわってしまった。

「悪い！大丈夫か？！」

ぶつかった相手がすぐに横たわった私に声をかけてきた。

私は痛いのもあったけど、それ以上に鴎斗の事が悲しくて涙があふれとまらなかった。

「うわ——ん」

恥ずかしいぐらい大きな声をあげて、その場で泣いた。

鴎斗の好きな人が、彼女だったらどうしよう——

二人が恋人だったら、どうしよう——！！

「頭も打ってないようだし、打僕もないみたいだから大丈夫だと思うけど、念のためしばらく休んでいくといいわね」

「はい。有難うございました」

「それにしても、階段を駆け降りるなんて信じられないわね。こうなったのは自業自得よ。反省しなさいね。それじゃあ、私は用があるから席外すけど、何かあったらまた連絡してね」

「はい」

大声で泣いている私を彼が抱きかかえて1階にある保健室へと運んでくれた。

保健の先生からは小言を言われたけど、彼は何も言わなかった。

大声で泣いたのに、何も聞いてこない。

「本当ごめん。俺も気づいていれば、ぶつかってなかったのにな」
保健の先生が保健室で出た後、彼は言った。

「いやいや、明らかに私が悪いし。ごめんなさい」

ベツトの上で横なっている私は小さく頭を動かして謝った。

「でも、どこも何もなくて良かった——それじゃあ、俺もそろそろ戻るよ」

「あ、うん……あ、あのさ……その……」

「わかってるよ。このことは誰にも言わないから」

「いや、そうじゃなくて……ありがとう……良かったら名前……教えてくれる？」

「虹岡 俊」

「私は、早乙女 郁乃」

「早乙女 郁乃……ああ、メイド服でたこ焼き焼いてたっていう芸能科のアイドル」

「気がつかなかった？」

「俺、あんまりそういうの得意じゃないんだ」

私は思わずクスツと笑みを漏らしてしまった。

「泣いてる顔よりそっちのほうがいいな」

「ありがとう。——あ、あのさ……」

私に背を向けカーテンを開けた時、私は彼を呼びとめた。

「ん？」

「あの……もしさ、す……好きな人に、好きなコがいたらどうする？」

彼は、え？と言わんばかりの困惑したような表情を見せていた。

「あ、ご、ごめん……忘れて！なんでもないから」

私は恥ずかしくて、布団を頭まですっぽりかぶった。

「——俺は、あきらめない。かな」

そう彼が言った後、ゆっくりと布団から顔を出して彼を見た。優しく微笑んだ後、虹岡 俊という男は保健室を出て行った。

012・屋上は立ち入り禁止です(side ikuno)(後書き)

なんとなく二人を合わせたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5879q/>

眼鏡ちゃんと王子様

2011年5月8日14時41分発行